

集落活動の社会教育的意義に関する研究（下）

—内間青年会の字実践、担い手のライフヒストリー分析を中心に—

小林 平 造〔鹿児島大学教育学部(地域社会教育)〕

A Study for the Lifelong Educational Significance of a Community Practice in Okinawa —Community Practice of the “Utima Seinenkai” (a young Men’s Association); of Utima Town Urasoe City Okinawa Prefecture, and Analysis of the Supporter by the Life History Method—(The Latter Part)

KOBAYASHI Heizou

キーワード：青年、自立、沖縄の集落、ライフヒストリー、ヤング・アダルト

はじめに

本論文は、同表題（上）に続くものであり、II. -5から始まる。はじめに論文全体の章・節構成を紹介しておこう。

はじめに

I. 内間青年会と青年の生活世界、3人のインフォーマント

1. 「字実践」概念と内間青年会（浦添市）への着目
2. 21世紀日本の青年問題と沖縄・内間青年会における青年の生活世界の検討
3. K氏（40歳）とA子（28歳）、T（25歳）の生活歴

II. 青年の自立と生活世界としての内間青年会活動の意義

—内間青年会活動は、内間の青年達の自立に、どんな意義を持っていたか—

1. 地域に若者の「居場所」をつくり、子どもと青年が育ちあえる人間関係を創造する
2. Tにとっては、家庭崩壊と高校「落ちこぼれ」、非行から救われる居場所だった
3. 青年にとっての芸の修得（継承）、熟達の意味
4. 子どもが育つ地域観と親の自覚の形成を生み出している（人生の見通し）

{以上、(上) }

5. 内間青年会づくりとエイサー・芸能、そしてまつり（大綱引きなど）づくりを通じた青年による字の地域づくり

6. 子どもエイサー指導、中高生へのエイサー指導、そして子どもの健全育成活動を通じた青年による字の地域づくり

7. 内間青年会という生活世界は、Kの社会的自立を生み出した。そのことが、彼の経済的な自立を保障したことの意味

結 語

{以上、(下) }

5. 内間青年会づくりとエイサー・芸能、そしてまつり（大綱引きなど）づくりを通じた青年による字の地域づくり

内間青年会が発足して11年が経過した。それは、20年ぶりの青年会づくりに始まり、内間エイサーの創作（牧港青年会に学ぶ）、棒術や獅など芸能の継承、そして大綱引き（まつり）の、青年自身による継承、創作活動の歩みでもあった。ここで重要なことは、都市化の波に洗われた内間で、青年の居場所としてのコミュニティを生み出し、芸能やまつりを核として青年会活動を定着させたことである。沖縄に育った青年の憧れの対象としてのエイサーや芸能、まつりの取り組みを中心の活動としてきたことが青年会員一人ひとりの青年と青年会組織自体に様々な力を与えてきたといえよう。

エイサーは、当初、牧港青年会のものから学び、徐々に内間青年会のエイサーへと創作してきた。「唐船ドローイ」、「安里屋ユンタ」、「花の十五

夜」などエイサーのそれぞれの曲も、それぞれに創作してきたものである。また、みやらびエイサーのティーモイ（手踊り）も、通称、「こっけい踊り」といわれる「ダイサナジャー」も同様であった。いずれも、字内間の文化を再生させるとりくみであった。

これだけではない。エイサーは、「エイサー道ジュネー（巡礼）」として、かつて行われていたように、演舞を行いながら、集落内を練り歩く取り組みも復活させた。沖縄にとっては、盆の御霊に対するウムケー（お迎え）やウウクイ（おおくり）の行事であり、字内間の人々が、この取り組みをいかに歓迎したかは、容易に想像できよう。また、1996年には、那覇市首里の大名交差点での「ガーエー（我栄）」が、平良町、大名、沢砥、内間、それぞれの青年会によって取り込まれるようになった。これは、同時に各エイサーが演舞されるもので、まさに青年が心躍らせるエイサー演舞となっている。内間青年会は、この取り組みにも、子どもエイサーを参加させてきた。道路上で実施するため、危険な要素もあるが、子どもと共にとりくむ青年エイサーを具体化してきたのである。勿論親の許可を得てのとりのくみである。

圧巻は、10周年を記念して取り組まれた「内間大綱引き」の60年ぶりの復活である。まず渡嘉敷島の大綱引きに学び、綱づくりに必要な藁をつかっての綱の編み方を修得し、藁の確保もここにお願した。しかし材料不足だったので、伊是名島からも藁を運んでいる。自治会は協力的ではなかった。そこで、大綱引き当日に必要な神人による「御願」は青年会によって実行された。しかし当日になると、青年会OBが30人、婦人会も協力、そして警察も30人の動員、市長や教育長も参加し、500人から600人の参加で大綱引きは成功している。多くの人々が感動し、青年会の取り組みは大いに評価されたのである。この大綱引きの成功に感動して泣いた当事の青年会長は、「青年会が苦勞して一つのまつり、神行事を成功させて、地域の人々に評価され、地域の人々の心を一つにできたこと、地域を青年の力で動かすことができたこと。それは、自分自身の自慢であり、誇りでもあります」と述べている。

このように、字内間におけるこの間の、芸能やまつりの再生と再創造の取り組みは、11年前から復活した内間青年会によって担われてきたのであった。正に青年による地域づくりの取り組みそのものなのである。

ところで、こうした取り組みが、字内間の自治会にどのように受け止められ、評価されていったかが大切である。なぜなら、内間青年会は当初、「不良の集まりであるので問題だ」とされてきた。また、その構成メンバーの半数以上が字内間外の在住者でしめられていたことなどが、自治会から拒否反応を受けてきた経緯がある。後者は大きな問題ではない。問題は「不良青年による青年会」という評価を、いかにして乗り越えてきたかである。そして、そのことが青年達の自立にとっていかなる意味をもっているかが重要である。この意味では、内間青年会にとっては、内間自治会にその存在をいかに評価してもらい、受け止めてもらうかは、少なくない課題であったのだ。

先に指摘した大綱引きの経過が、そうした評価において決定的な場面であったことは理解されよう。Kは、青年会が第1の取り組み課題として内間にエイサーや芸能、まつりを定着させてきたことと同時に、地域の子どもの健全育成を会活動を2番目の取り組み課題とし、真摯な子育ての取り組みを展開してきたことが、青年会が徐々に評価されてきた要因だと述べている。ここは、A子の証言に耳を傾けよう。A子にとっては、20歳前後のまだ何も分からない頃、内間自治会の大人たちの冷ややかな目線はけっして楽に避けていられるものではなかった。その彼女が、地域社会に認められたと感じた決定的な局面があった。それは、先に紹介したガーエーの取り組みに成功して、内間公民館に帰って来た際のことであった。

「私達内間青年会は、子ども達もガーエーに参加させますから。もちろん子どもが参加する際は、多くの親も一緒に歩いています。それで、子ども達もみんな感動していますし、青年も、親も感動しているんです。それが背景にあったと思うんですけれど。ガーエーが終わると、私達女性の青年会員が、先に公民館に帰ってお祝いの食事の準備をするんですよ。それで、大名から、『しま草

履』をぺたぺたとさせて（この草履は、女性がエイサーを踊る際に履くものだが、華奢なつくりになっているので、あまり粗く扱おうと壊れてしまう。それでも、急いで、ぺたぺたとさせながら、やっとのことで公民館にたどりついたことを意味している。エイサーを精一杯踊るのがガーエーの興味深さである。したがって、十分に疲れているわけである。）急いで帰って来て、準備をしようとしたら、内間婦人会の人たちが、食事の準備をしながら待っていてくれたんです。こんなことは初めてでしたから。（A子は、おもわず目頭を熱くしながら）私、泣けました。こんなに受け止めてくれたんだって。私たちの取り組みを理解してくれたんだって。泣けました。嬉しくて」。気丈なA子の涙を見て、インタビューしていた筆者まで涙してしまった場面であった。

なるほど。婦人会メンバーにしてみれば、自分達の娘、息子や孫たちの面倒をみてくれて、エイサーのガーエーをやってくれている青年達に、精一杯の感謝をしている行動だったのであろう。A子たちにとってみれば、取り組みを感動的に成功させて、みんなで成就感を感じている時に、このように自分達を慰労してくれている女性たちに、深い共感と敬意を感じたにちがいない。ここのシマで、子ども達と共に、胸をはって取り組んで、共に感動して。そして、シマの人たちから評価され、感謝され、慰労される。そんな体験をしたら、どんな青年であっても、関わった総ての人々に共感の感覚や共に生きている実感をもつことができるに違いない。

A子たち青年が、地域社会に受け入れられていった時、それは、大きくて大切な実感を、素直に受け止めた機会として、生涯を通じて意味ある経験として、成就感や誇り、そして共感する感性が心の中に刻まれたにちがいない。

6. 子どもエイサー指導、中高校生へのエイサー指導、そして子どもの健全育成活動を通じた青年による地域づくり

すでに指摘してきた通り、内間青年会の目的には、伝統芸能の継承と共に青少年の健全育成がうたっている。彼らの青少年育成活動は、子どもエ

イサー（「パーランクーサークル」という。パーランクーは、片手で持てるタンバリンのような小さな太鼓。）の指導だけでなく、多様である。まず、2003年度の取り組みから、それらを紹介しておこう。一つは、春のピクニックである（20名参加）。二つは、自然と遊ぼう太陽の子（35人参加）。クリスマスパーティー（子どもエイサーと共催、40名参加）である。これに、子どもエイサーの入会式、自転車講習（内間小学校と共催）も加わる。このように多様な内容をもっているが、活動の中心は、子どもエイサー指導である。毎週1回、90分から120分位の時間、約60名位の子どもたちに内間小学校の体育館でエイサーの指導を行うものである。

エイサー指導は、あと一つの形態がある。それは、青年会のたまり場に直接やってくる中学生や子どもへの指導である。いずれにしても、このような形態でのエイサー指導が、青年会のエイサー道ジュネーやガーエーに参加する子ども達を生み出してきたのである。

ところで、内間を含む地域の中学校では、集団暴行事件（死傷者がいる）が、数度おきている。2002年4月と03年2月の事件では、内間青年会が直接に問題をかかえた中学生に、青年会で一緒にエイサーを演舞することを薦め、少なくとも中学生たちが、公民館に足を運ぶようになってきた。これに関わっては、10年ほど前のKがかかわった事件の際においても、同様な取り組みを展開してきた。このとりくみに直接の関わりを持ってきた現会長は言う。「そうして青年会に来る中学生は、ほとんどが学校でも素行が悪く、家庭環境をみると、片親がほとんどで、親の躰の弱さ、愛情不足がみられます。それで、そういう親に代わってめんどろをみられるのは、地域なのですが、実際は、内間青年会です。自分達の方で子どもを育てていこうと考えています」と。「どんな効果があるかということ。エイサーを教えるのは勿論ですけど、地域が子ども達を知ること、問題行動がとれなくなり、逆に挨拶が出来るようになりました。またエイサーを通して、問題を抱えた中学生が、小学生たちの良きニーニー、ネーネーになっています」と。こうして、学校では、

特別な指導を必要とする中学生達が、内間青年会でエイサーなどの練習を続けることで、前向きな生き方を見出していることが多いのである。

内間を含む校区の中学校では、内間青年会の定職のないメンバーがリレーで「スクールガード」を請け負ってきた。それは、就労先ということであり、彼らにとっても救われているのであるが、なんといっても、同様な体験を持っている青年の教育力には目をみはるものがある。先のTに再度登場してもらおう。「一年前ぐらいから青年会のたまり場に出入りしている子どもにまず声をかけて、『ヤンキー』の情報を収集したんですよ。それで、そういった子達を集め、あえて職員室前の中庭で、週4回、放課後2時間程度エイサーの練習をさせたんです。始めは軟弱でしたけど、だんだん胸はってきて。そのうちに気概を持ち始めて。メンバーは男子4名、女子8名でした。発表の機会があったほうがいいので、浦添高校の体育祭に出演しました。好評でしたよ。」それで、「学校でそういう活動的なことが出来るのであれば、やるんだったらヤナワラバアと呼ばれる不良グループにやらせたい。やっぱりなにかやらせることで、エイサー活動でもなんでもやらすことで、何か目的持ってから努力する。それなんかってやっぱりルールの中に生きていくのが難しい子達じゃないですか。それで、自分が持っている材料のエイサーを通して、一つずつルールを作っていたんですよ。最初は『お前なんかの楽しいようにやれ』って言って、少しずつはまってきたら『じゃあ、ちょっと待て。お前トイレ行くにしても何も言わないで行くの？先輩がいるのに、指導してる人がいるのに、こんなしてトイレも勝手に行くのか？何も言わずに帰るか？それは俺に対して失礼じゃないか、指導してる人間に対して失礼じゃないか？』って。そしたら『次からはやりません』って。そうやってやっぱり一つずつルール覚えさせていって。それが学校生活の中でも生きていくのかなって。例えば、授業中に抜け出すのもやっぱりいけないことだし、『お前今日やったな、授業抜け出したな。エイサーの時もそれやったらだめなんだぞ。なんでか教えてるだろ？自分が学んでる事なんだよ。みんなもそうやってるだ

ろ。そうやってるなかでお前も生きていかなきゃいけないんだ。一緒にそうやって生活していかなきゃいけないんだ』って。そうすると『そうですね、わかりました』って。やっぱり厳しいかもしれないんだけど、ルールの中に自分が生きてる、生きなきゃいけないってことを自分は教えたかった』。と述べている。

「職員室前での練習は、最初はもう恥ずかしがったり、いきがったりでやんなかったりもしたんだけど、褒めたらさ、満面の笑みを浮かべるの。それで俺思ったのは、やっぱり褒められる事が少ないんだ、しょっちゅう怒られてばかりだから。家でも学校でも怒られてみたい。こいつらの居場所ってあるのかなって。」「恥ずかしいって言うてるんだけど、それでも逃げ出さなかったから、あ、別に目立つ事嫌いじゃないんだなって。基本的にはやっぱり目立ちたいからそういう格好もするわけだろうし。先生なんかにも認められればそれは嬉しいだろうし、人に認められるのが喜びって知ってたから。自分もやっぱりその頃は、怒られるよりは褒められたい、認められたい。でもそういうことしてくれる先生ってあまりなくて。自分は先生ではないけど、そういうことを知ってるから」。

言うことなしである。スクールガードを地域の青年会に任せたことが、良い成果を生み、少なからぬ課題をかかえた生徒が内間青年会でのエイサー指導を通じて立ち直っていく姿があるのである。子どもが育っていける地域を形成することが内間青年会の目的であり、青年会の伝統になりつつある。問題中学生へのとりくみや子どもエイサー指導、エイサー道ジュネーやガーエーを子どもと共にとりくむ姿をイメージしてみよう。なるほど、もっとも子どもに必要な世代がここにいるのである。Kが言っていた。「子どもが育っていける地域づくりは、青年会でこそ担えろ」と。ここに、地域文化と子育てに、画期的な意味を持ち始めた青年層が登場しているのである。

7. 内間青年会という生活世界は、Kの社会的自立を生み出した。そのことが、彼の経済的な自立を保障したことの意味

ここでは、Kの労働における生活世界に着目して、経済的な自立の側面を検討することが、主な目的である。その際、Kの内間青年会を通じた字での活動は、どのような意味を持っていたのか。これを考えてみたいのである。

1) Kの、人生における挫折

Kの自立に注目して、生活史をふりかえってみると、二つの点で挫折を体験していることが分かる。

1つは、高校時代の進路選択における挫折である。かれは、水泳が得意であったことから、海上保安官になることが夢だった。しかし、「最低の成績で入学した高校」(K)で、その夢に届くほどの成績へと至らず、「また、遊びたかったこともあって」(K)、この夢の追求はとりやめている。Kはいう。「たばこ、酒、シンナーもやったからね。遊びたかったから勉強もしなかった」と。「落ちこぼれ」から非行への危機的な状況にあったのだ。結局、大都会に出てみたいこともあり、大阪に行き、調理師になることを選択している。大阪では、6年半を調理師として過ごし、その間に調理師免許を取得している。この免許取得は、彼の人生に大きな意味を持つ努力であったといえる。

以上の経緯であるから、それを「挫折」とは、言いすぎであろう。しかし、能力主義教育と能力主義の価値観がまかり通る日本社会においては、高校までの成績での「落ちこぼれ」は、日本の青年達の生きがい観や人生観に大きな影を落としている。Kにとって、この挫折感をいかに乗り越えるかは、青年期の大きな課題であったにちがいない。この点に挫折したままであれば、「危機としての青年期」の克服は、困難であろう。Kは、これを乗り越えたといいたい。調理師としての生き様を貫きとおしたからである。Kの悔しさと悲しさ、そして迫力の原点はここにある。

2つは、大阪から内間に帰郷し、洋食屋を営むが、3年ほどで経営破たんしたことである。また、その後も調理師としての職業生活を望むが、それぞれの就職先が経営破たんして、何度も職を失い、出直しを求められたことである。調理

師として生きていくことについても、なんども何度も悩み、混乱している。Kの25歳からの10年間は、調理師として生きることそのものの模索の時間であり、自分自身の甘さやふがいなさを背景とした、長いながい挫折が続く10年間でもあったのである。

Kが決定的にその長い挫折を乗り越えるエピソードをつかみ出したのは、なんと37歳の頃であった。36歳で就職した大平のレストランが、ここでも経営困難に陥り、飲食店K屋に調理師修行に向きせられたこと、そこで歯をくいしばって修行につとめたこと、その時である。Kの妻は、「以前のKなら、修行の厳しさに負けて、絶対に辞めていたと思う」と言っている。辛く厳しい調理師修行であったが、そこでKは副料理長にまで昇格し、この店の部長が自立して新規事業を進めていく際に誘われて現在の飲食店Sに入職。そこで調理師として、また経営陣として、安定した職業生活を送っている。

Kにとっての2つ目の挫折は、沖縄の地域経済問題が横たわっており、この分野の青年労働者に苦難を強いているという問題があるだろう。しかしKにおいて、このことは当面の問題ではない。彼がいかにして、この長い挫折を乗り越えたかが検討課題なのである。

2) Kのめざましい社会的活躍—内間青年会づくり、地域おこし、沖青協会長—

Kが内間青年会づくりにいそしんだのは、その長い挫折のなかで、①なによりも、自分を認め、評価してくれる、社会関係を求めたことがあろう。そして、②自分の現在に共感しあえて、共に語れる仲間を求めたことがある。青年の居場所であり、社会参画といってもいい。これは、職業生活の側面からとらえた意識である。一方で、青年は地域社会に生活する存在でもある。したがって、③生まれてきた我が子の先行きを考えて、豊かな人間的環境と自然環境のなかで子どもが育っていくことの出来る内間にしたいと考えたことは理解できる。また、④沖縄の字に育ってきた経験をもつ青年が、エイサーや芸能、まつりを担える青年集団づくりを望んだことも、十分に理解でき

る。そして同時に⑤Kにとっては、長い挫折のなかで、その苦しみを癒し、苦しみからのがれる場でもあったのである。

このように、Kにとっての内間青年会づくりは、労働生活と地域生活との複雑な意識のなかで展開したものであった。さらには、これに家族との生活の側面が加わってくるのである。

内間に青年会をつくることは、簡単なことではなかったはずである。字や字の青年会に注目することそのものも、現在の沖縄社会にとってはマイナーな発想ととらえられるであろう。少なくとも、12年も前では、こうした意識が主流である。そこに、青年会をつくり、青年による芸能とまつりの復活、まつりによる地域おこしを展開したことは、注目せざるを得ない。Kは、内間でのとりくみをベースにして、後には沖青協の会長をつとめてもいる(沖青協のとりくみのなかで、Kは、内間青年会のとりくみの意味を客観的に把握し、自分自身を深くみつめること、青年が抱える困難にまけてはならないことなどを学んでいる)。まさにKならではの、本領発揮の場面であった。Kは、このとりくみのなかで生きがい観を覚醒させ、内間青年会に集った多くの青年に前向きな生き方に関する影響を与えている。

Kにとって、内間青年会での一連のとりくみの創造は、彼が子ども期、青年期を通じて身につけてきた力量に支えられていた。それは、まず①仲間を束ねて人間関係を調整していく力であり、②とりくみの意義を語ってリードする力である。また③青年以外の世代との交渉能力でもある。要するに、彼は、子ども期に「ガキ大将」であったのだ。こうした力量にあと一つの力量が加えられよう。それは、字の人間関係や自然環境を体験してきていること、そしてエイサーや芸能への憧れをもった体験であり、これは、④字に内間青年会をつくることの意志力をうみだしていた。子どもへの想いも、この意志力を強化していた。そして、内間青年会を通じた活動の成功は、地域社会のなかで活動していくことの力量や確信を与えてきたといえよう。

そして、Kが内間におけるとりくみのなかで、身につけた最も大きなものは、自分を認めてくれ

る人間関係であり、居場所であろう。さらには、自分の可能性への自信であり、人生を生き抜く生きがい観と喜びであろう。内間青年会の復活、再創造という大きな困難にぶつかっていたからこそ、その確信と喜びも大きかったといえよう。こうした社会的な自立の側面は、青年の自立総体に対して大きな意味を持っていたにちがいない。

3) その10年間の家庭と経済を支えたもの

そして……。

これは、インフォーマントとしてのKと、筆者との間で何度も語ってきたことであるが、その挫折と成功が入り混じる10年を経済的に支えたものは誰だったのかということである。はじめの頃Kは、このことを軽く語っていた。あるいは、無自覚であった。

彼はいう。「悩んでいましたよ、自分は。本当に自分にふさわしいものは何なのかってね。職業的な面では、曖昧なままでしたから、確かに、青年会をやったことは、居心地のいい居場所を求めたということでしょうし。結局逃避でもあったかもしれませんが。でも、悩むことが必要だったんです。自分にとっては」と。「そして、今しかできないことがあると考えていたんです」と……

先にも指摘したように、その頃、彼の妻は、「今、お前のやることは、違うだろう」と何度も言ったという。「そして、これは、Kには言えないことですがけれども、離婚という言葉が頭によぎることもあった」と言っている。実は、この10年間の家計は、彼女の貯金とKの親からの援助で支えられていたのである。そのことは、これまで、Kには伝えずに彼女が実行してきたことであったという。Kの20歳代後半から30歳代後半にいたる10年間は、このように、彼の妻と親とが支えていたのである。まさにそこには、彼の「甘え」を支える妻の深い愛と親のやさしい愛情とが存在していたのであった。

Kは言う。「25歳で職を変えて、転々と職を変える。そしてまた事業に失敗。フリーターや失業状態の時も多かったわけです。その時、やたら心地のいい青年会というものがあって、それにのめりこんだんですね。そういわれても、しかたない

ですね。しかし、本気でしたよ。そして、自分としては、格闘していたと思いますよ。確かに僕は、同世代の連中、高校の同級の連中、それから見れば、異端児ですよ。でも、格闘していましたよ。連中は何ゆえにやっていたのかなと思います。自分は、格闘していましたよ（仕事と地域と人生とに……筆者）。確かに異端児だけど。父親はいいます。お前は、自分達より10年遅れたのだとね。でも、いま、後悔はないんですよ。」

4) Kにおいては、社会的自立が経済的自立への筋道をささえている

先にみたように、Kは、シマ社会の担い手へと成長していくことで、いくつかの価値観や実感を獲得してきている。それを彼は、今度の飲食店Sでの経営能力や調理師としての能力の形成という視点から、経営する力量を得たと説明する。その「経営能力こそ、内間青年会でのとりくみが自分に与えたものだ」という。「組織面や管理面で、青年会のノウハウが生きています。いまの僕は、充実していますよ。この10年の経緯は間違っていなかったんだといえる自分がいるんですよ」……。「25・6歳のころの経営は調理師としての能力があっても、経営能力がなく、行き詰まっていたからね。」

経営能力の問題だけではなかった。妻は言う。「時々、大酒飲んで二日酔いで昼のランチづくりに行かなかったりで、本当の意味で真剣ではなかったからね」と。そして、「飲食店K屋での雰囲気は全然ちがったからねと」。経営能力だけではなく、ここでの成功は内間青年会の創造の体験を通じた地域社会との格闘が与えていたものがある。それらは、すでに指摘したように、自分の可能性やとりくみの確信、そして喜び、それらを通じた意志力などである。

地域における生活世界のなかで、Kはどのような価値観や力量を身につけてきたのであろうか。これを、やや詳細に吟味しておこう。Kが身につけてきたものは、①責任ある行事をとりくみきる「責任」と「正義」と「喜び」の感覚である。②後輩や出来ない者を支えて技術や人間性を向上させる先輩としての「思いやり」、そして「努力」

と「忍耐」。③仲間を励まし、「見通し」と、「展望」を指し示すことの大切さの自覚。④自分自身を曖昧にさせず、成功にむけて努力する、「自分を律する力」⑤とりくみへの「情熱」やとりくみの「成就」がもたらす「充実感」と、仲間とともに成就させ、喜びをわかちあうことの「感動」。⑥多少の失敗や個人的問題の表出などはみんなでカバーし包み込んでしまう。そんな雰囲気がある。そこに生まれる仲間への「信頼」や「尊敬」のこころ。以上である。

それらは、労働の世界が持つ価値観に通じるものが多い。そのような規範や価値観を、Kは、内間青年会でのとりくみを通じて獲得してきたといえよう。

すなわち、Kにとっての経済的自立は、社会的自立や精神的自立によって支えられたということがのできるのである。その社会的自立や精神的自立を大きく支えたものは、Kの生活世界を構成した字内間における内間青年会での諸とりくみや体験であった。そして、Kにとっての経済的自立の確立は、30歳代後半であったといえるのである。Kは、ここに至って、確固とした青年期の自立を確立したといえるのである。

結 語

ここには、自らの生活世界を内間青年会を中心につくり上げてきた人物をとりあげて、その生活世界がもっている「意味」を検討し、「意味の構築」をめざしてきた。登場人物は、K（40歳）を中心にして、A子（28歳）とT（25歳）であった。そこで、とりわけ大きな発見は、2つあったと思われる。

一つは、なんといっても、内間青年会の持っている取り組みの、豊かさである。特に青年に居場所を形成し、芸能とまつりの再創造を通じた地域づくりと、青年による子育て活動の展開である。それは、本論文Ⅱの1から6の意味を明らかにしている。青年の自立にとっては、社会的自立と精神的自立の獲得に深い意味を持っている。

二つは、現代日本社会において、青年の経済的自立が遅れる傾向があるなかで、地域社会における青年の生活世界としてのシマの青年会活動が、

社会的自立や精神的自立を育み、これが、青年の生きがい観や生きる喜び、まっとうに生きる規範を与え、経済的自立の筋道を立てていくことを支える可能性をもっていることである。それは、本論文Ⅱの7に示されている。この二つ目の意味するものは、日本的な様相をもっていることを特に指摘しておこう。つまり、20歳代後半から30歳代にかけての経済的自立が遅れることに対して、親・家庭が経済的に支えることである。本来これは、国や自治体などが青年向けの就労対策を充実させることで解決しなければならない問題であり、極めて現代日本的な現象である。

さて、ここでは、「青年の自立」を、経済的自立、社会的自立（生きる場とアイデンティティ）、精神的自立（規範の確立）の3要素からとらえ、個々のライフヒストリーから、自立の3要素がどのように獲得されていくかを分析視点として、青年の生活世界としての内間青年会が果たしている役割の意味を検討してきた。

総括的に数点指摘しておこう。まず、①日本社会においては、青年の就労難も介在して青年の経済的自立が大きく遅れる、ないし曖昧になるという問題がある。これに対して、字実践が、まず社会的自立、次に精神的自立を可能とし、経済的自立の獲得を支える可能性が示されているということである。また、②内間青年会を構成する青年たちには、次のような実態が明らかになっている。例えば、学校教育からの「落ちこぼれ」、逃避、非行、そして家庭崩壊問題や青年の就労困難などである。それらで、生きがい観を失いつつある青年が、内間青年会の実践を通じて、自らの居場所とアイデンティティ獲得の場を作り出し、社会参画のとりくみを展開していることである。そしてこれを通じて、社会的自立が獲得されていることである。③さらに、芸能を担う技の獲得とまつりの創造が、自己表現の手段、共同の感性や成就感の獲得、規範確立への模索を可能とし、生きがい観やアイデンティティ、規範の獲得を実現させてきたことである。

集落活動の社会教育的意義は、内間青年会における青年の場合、このような質を持っている。今日における青年の自立の在り様を考えていくと、

内間青年会が創造している青年の生活世界には、注目すべき意味が存在していることが理解されるのである。

最後に、本研究に関わって、今日の社会教育研究上の問題点について言及しておきたい。それは、今日、実践的にも、理論的にも、18・9歳から30歳前後の（勤労）青年問題が軽視ないし無視されている状況についてである。大方の論議は、「子ども・若者の居場所」論という問題として整理され、むしろ17・8歳までの子どもと青年前期問題に限定されてきた傾向があると考えられる。ライフヒストリーの方法論による内間青年会の青年の生活史に関する実証研究はその問題としての傾向に、あらたな提起をするものである。すなわち、18・9歳から30歳前後までの青年の自立にとっては、固有で切実な学習課題が存在しているということである。